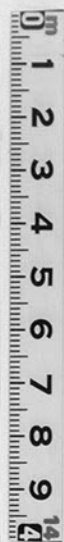
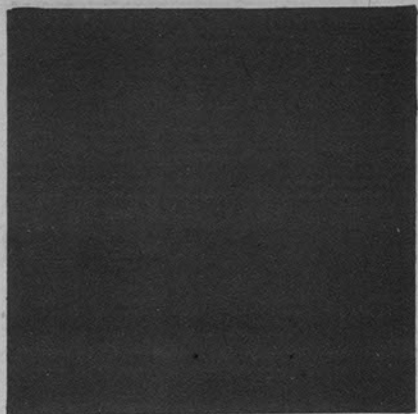


2



突

第二輯

——評 論——

明 日 へ……………高 瀬 勝 雄
もだん・ふあーま……………松 木 純 一

——詩——

或	る	時	妻	木	泰	治
●			大	浦	弘	四郎
畑	は	荒	猪	狩	満	直
無		題	高	橋	久	由
み	み	す	中	野	大	郎
月	島	景	小	林	直	人
君	と	僕	土	方	定	一
炭		田	松	本	純	沌
無		題	三	野	混	夫
無		題	石	川	武	平
プロ	レ	タ	草	野	心	造
俺	に	士	横	田	卓	夫
		が	島	田	春	馬
●			猪	狩	一	節
無		題	五	十	風	郎
警	網	戦	松	村	勇	清
白	日	幽	中	野	雄	雄
最		初				
后		記				

明

日

へ

高

瀬

勝

男

藝術と社會 其處に不絆的な延長と具体があるべき筈だ 原始時代の未發達なる集團生活にあつて藝術が常に周到なる實感と創造を以て集團生活の補促と訓練と助長を急速にしたのだ 經濟、政治、宗教の概念が歴史的變化に極く微温的な革命の前衛を維持しつつ現在の世界觀に迄到達した そこに藝術が進化の直接なる原動力としてこれら社會文化の歴史的變遷に依る世界觀を最も理智的に主觀的に最も意識的に自主的結合の社會主義成体へと同化させる 總べての母胎として藝術が包蔵すべき價值決定は經濟、政治、宗教の價值決定であり價值變換である 專壓と暴戾と支配をもつ現代資本主義的成果の價值決定であり解剖であるのだ

藝術の主觀的ムヅマンが現代資本主義に向つて起つ時個人主義的自已耽美は排撃されて眞實の立体的生活(集團社會)の擴充を欲求し整理し新世界面の樹立へと突進するのだ 原始相互扶助精神の獲收 自由共存の精神的本体へと今迄の支配と奴隷をもつ紳士の規範に抗爭する

人間生活の無意識的誇張 現實の感覺的興奮さも必然性が歴史的に直立する藝術の普遍形式を強烈なる集團生活の方向に伸展させ潜行させて社會主義的表示へ内証させねばならない

各人のもつ創造意欲が洗練された自由主義の元に滿された時綜合律となつた生活の質量的感覺有機的社會結合は進化と不分律なる直屬關係を作るのだ 藝術が形而上的抽象として藝術以外の藝術に立入ることを罪惡し藝術の冒瀆として個人的享樂にのみ美の材料を供給することを藝術の瑞喜とした在來の美學は生活の現實的不具として勇敢に拒絶すべきだ

藝術は男も女も總ての生産關係に權利をもつ人間の意志燃焼であり運動であり良心であるのだ 不具と廢疾をもつ藝術

術が社會の永遠性の上にどれ程の強みがあるか 休止することなき集團欲求の前面に疲勞した藝術が如何に働いたか 紳士關的制度の分体として中世紀産業發達以來絢爛にされた藝術が人間の社會的結成に如何様に低觸したか 如何様に君達を教化したか 資本主義化された藝術 資本主義擁兵となりました藝術 生きようとする人間の本能欲求する集團生活の可能に枯衰した不生産な藝術が何になるか 群集は今藝術に渴いてる

詩人から君達へ

詩は土の風生だ 精神的分散の統一的成果だ 精神的純成の直面的發生だ 詩には時間がない夜と晝がない 制約がない自由だ よりよく寫る現れる それが詩だ 死と生の對角線上にある躍動しつつある人生の單的勃發が詩の主觀的結構だ 我々は生命を欲求する 詩は人間に勞動力を供給する バンを生産する 驅りと不平をもつ都會の剩餘物でなく自動車と劇場の排泄物ではない 二十世紀のバケモノを尊敬する人間に詩があるならば傳統と修辭の混濁した愚劣なものだ 他人の行儀と他人の容貌を真似る都會人に學校が必要であり教會が必要であると同じく無精に軍人が必要であり警察が必要であるのだ 掠奪と攝集と所有の方法を便する爲に有ゆる人爲的概念が重んぜられる 詩は土の人間の發展でこそあれ道具でないをうして意志と本能の旋律だ 人生とは 詩とは 安い手品と捨場の上にあるのではない

もだん・ふあーま 松本純一

……詩集 開聖者のこと……

家が立つてゐた

黒い

氣が通はない

おれは生え抜きた——開聖者より

おれは蒼穹に放れたさくらの花を知つてゐる

空氣が動いてゐなかつた夕空へ口を裂いてカツカツ

笑ひこけた砲丸をみてゐる

土鏡におれはおれの顔を焼きつけて初毛の生えたム

クムクした胴体に幾万幾億のこどもらをめんごがつ

た

嗅いたり 泣いたり ねたんだりするこどもらに甘

い果實を掘り下げたり下げつつあたへたことも覚えてゐる

てゐる

おれの廣くもない額に斯うして太い幾條かの水々し

い皺が植つたのだ

草原の上をふいてゐる風か

それきりだぞ

おれは思はなかつた

おれはそんなところに

土を蹴つ削いでゐた

風も笑つてゐた

どんなにいいものを

おれはこの土にやりたかつたか——開聖者より

おれは成可く素裸で土と愛冠したがひるまよくみる

黙りこいだ雲を掌にあつめて恐ろしい力を感じた

制止したままぐんぐん落下しそうな雲の軀の中から

分泌する「生存の魅力」におれの肉体がばらばらに

解体するのを氣付いた

これがおれの生きることとおれのこどもらの脈をふ

とらせる絶對の糧なのだ胸を張り切つていのちを

響かせ そのひびきによろこんだ

×

おれといふのは三野混沌さんかもわからない

また おれは詩集「開聖者」の伸び仕度に急がしい

私の 百姓といふカムフラージかも知れない

或る時

妻木泰治

俺あらが こうしてるのを ごんなにか
呑氣そうに見えるかい

それにやせ切れてるなんて

おめいは よつばど 呑氣者だよ

俺のこと知らねいだな

俺あ前日

お父つあも 子供も

逆立ちになつて 歩いてるわい

手足を 見ろ

もぐらのような手

馬鈴薯のような土だらけな足

これが現在の俺だ

着物は汗に 喰ひ破られ 破れ目から太陽が

肉を殺す

鳥の畝間にみんな寄集つて休んでゐる

とこなんか けだものようだわい

おめいが こうしたところをみたら

よりつけめいな

これでも おめいは こんな仕事をやるつ

てゆのかい

雲雀の世界のような世界が 目前にきた

ような氣がする

大浦弘四郎

突風は岬をこへた

突風は海面をなでた

億万の魚族は今一齊に動きだした

もりあがり

ゆれあがり

雨が横なぐりに吹きつける

ビュー ビュー ビュー

暴風雨

明日は和かな朝をもつであらう

畑は荒され

猪狩満直

はてな と思つて おら

土に目ひつつけてみたら

みたら みたら

おら がつかりしちやつた

とうきび 大豆

おらうんととるべと思つて

いきなり蒔ただつたが みたら

おらしんねでゐたんだつたが

いい歌きかしてくれつともつて

それさ仕事がせわしくつて

しんねでゐたんだつたが

鳩・鴉の畜生だ

とうきび・大豆

ペロリ

おらこせつばらやけるし

となりの百姓らにそのことを話したら

おらどこでも おらどこでも

おらどこでも おらうちでも

おらら歌なんといんねい

おらら全くだまかされてゐた

おらら全く目醒せ

おららてんでに銃砲もて

おららしつかり團結しろ

おらら狙ひを定めてドンガリやれ

無題

高橋久由

なみをが死んだつて

かせでぬてゐるおらの横つらに

障子のめごからつつこまれたおかの手紙を

あをになつたまんま 両手で高くもちあげて

なんべんもなんべんもよみ返した

なみをはおらの従妹で

おらより二つ年しただつた
おかあにつれられて

なみをがうちへよばれて行くと

冬は前のほしばのやまを　ちつさい橋に

ふんばたがつた足と足と

四つの雪靴をそろへて

なみをのせなかにうぶさりになつたおらあ

ぎつしりなみをのからだをつかまへて

急な勾配も平氣で走らしたもんだが

なみをはめつばうれしがつて

なんべんもなんべんもやまに橋を引上げた

それがばかに頭にのこつてゐたんだか

そのばんようく夢にみた

目がさめたらなみをが戀しくてたまらなかつた

死んだつていふなみをが

かあいそでかあいそで

おらあ朝までなみをの佛にいのつてやつた

みみずだの蛸斗だの 中野大次郎

氣まぐれでヒステリックな蛸斗だの

土くれを掴んで泣き笑うみみず

そんな虫けらが體についたらふりすてろ！

ふりすてろ！

勿論おまへごもだつて連れてゆかれぬ法は

ないが――

何を語つてゐるんだ！

夜だ

夜だ

ぐつぐつしてゐる夜も明けちまふ

いま頃そんな寝言をいつてる奴は誰だ！

それでもついでゐたら潰してやれ

一匹潰すことは千匹も萬匹も潰すことだ

氣まぐれでヒステリックな蛸斗だの

土くれを掴んで泣き笑ふみみずが

始末に困ることはほんとうだ

曇天續きの塵捨場はこんな虫で一杯になつてゐる

月島景物詩 小林直人

――それでもプラタージュの並木路を

電車路が一本貫流してゐる

橋の上や街角へくると

私の浴衣は潮の匂ひに脹らんで終ふ

そして碧い海が

挟つこい家並の間から街路のはづれから河口から

輕快なスカートをひろげて私を手招きする

――ホラ！あれが　今頃から深更にかけて月島の

空を暗き渡る鷗の聲だ

撤水を終へた並木路の下を

媚々と散歩する若い人達は

みんな市營住宅地の

貧しい働き人の家族ばかりだが

いつの夕べも睦しそうで朗かだ

――そこで私の行きつけの飯屋の娘が

快適な夕べの情緒を私に贈する

「ああ　お晩です　涼しいね……」

私はそんな言葉をかへして

素朴な月島の銀座へ足を向ける

君と僕 土方定一

なせもつゝ真面目に最初聞いてくれなかつたか

私はもう一度現在の自分に就いて語りたくない

それはもはや私をも引きつけないのだ

君は私の沈黙から叫びを感ずる必要はない

親愛なる同志よ！

私の手を握つて呉れ！

君の言ひたいことは私の知つてゐることだ

ただこうゆう瞬間には抱き合はなければならぬ

もつと強く握つて呉れ！

私は新しい自分について語りたいのだ

炭 田

松本純一

無 題

三野混沌

頑固だ 頑固だ

いたるところ頑固な鈍突だ

頑固な黒團に打ち向つて手をふり足をふり血をなげ
つけるはだかの人間だち

おーい ゐるか！

おーい もつと強く呼んでみろ

おーい 頑固な山彦だ

炭盤を背でぐつきり押し上げてふんばつてゐるのは

坑木ぢやない

人間だ

——呼んでみろ

顔なんかすつかり扶ぐられて聲も出せないんだ

頑固な土つべらにちつと這つてる——

かたまつて躍動しながら

虫つけらの筋肉だ 生殖だ

そして新らしい太陽なんだ

土百姓は田市へ出た

土をかへした

うちかかる うちかかる俺と

暗い鳥の群てゐるやうな土

無限の苦しみへ

打ちゆでられた田市の綿雲

べちやくちやとその中でしやべる燕

つつちで一面にまづかに燃えかかる山

おお限界を突き破いた

おお空に進軍した

千万億万 俺たち百姓 土百姓の子

麥穂

あらゆる麥笛ラツパを集めて一齊にふけ！

さあ 俺たち 話しにならない鈍重さで

絶えまない收穫

絶えまない仕付

無 題

石川武夫

この頃 毎晩

蛙聲が 私を眠らせてくれるやうになつた

晝間

あの風見のてんべんに掲つた月を眺めて

ゐるときなぞ

ふと 聞き馴れた蛙聲が 湧くやうに

耳許に聴つてくる

私の寢床は蛙聲でびつしよりだ

プロレタリア行進曲 草野心平

肉体と肉体と肉体と肉体と——

鳴り響け喇叭 マツスの精神

指と指ではない

てのひらとてのひらとではない

腕と腕だ

君ではない

君と僕ではない

全体と俺だ

行けではない

叫べではない

突哨せよではない 行く叫ぶ突哨！

血脈は交流し咽び奔騰し

喇叭は鳴る マツスの精神

天國は暗タン 天國は行動

光！

光！

暗黒を突きやぶるもの吾等

方向づけられたもの吾等

グッ倒れ グッ倒れ グッ倒れ 恐れはない！

立ち上り 立ち上り 立ち上る 前進！ 前進！

鳴り響け喇叭 マツスの精神！

俺に土がもの言ふ 横田卓造

島田春夫

モツク モツクリ 土が躍る 土が躍る
ドブで化粧した

丸太のやうな腕ぶしが廻轉する

空は真圓だ

太陽の光線が俺の心臓を突き抜いた

風が赤炎をあげてさび廻る

モツクリ モツクリ 土が孕む

土が俺にもの言つたぞ

豚が太る

豚の腸が肥える

今に見ろお前は泣く時がくるんだ

だがお前と俺は兄弟だ

ああ 豚とねずみがよろこぶ

お前と俺は兄弟だ

そうだ そうだ

馬は暗い小屋で耳をたれてゐた

重い豆粕ひいてあの坂を登れなかつた

というので

親方が今日もかいば食はせない

といった

俺は馬の氣持がよく分つてゐるので一緒に

泣いてやりたかつた

俺が行くとうれしがつてバタバタ足を鳴らした

すりよせてきた首を抱いてやると

馬の温みが鼓動のやうにつたはつてくる

馬と俺 しばらくそこにゐた

それはばろばろに瘦せた馬であつた

無題

猪狩一馬

旅に出たが金がなくつて 腹がへつて

誰も居ない曠野のやちに蛙を追つた

蛙 食へ ヨハネ

蛙は ビヨン ビヨンとにげた

いのち はしかろ

蛙は ビヨン ビヨンとにげた

そのとき

俺は溜水に

みすばらしい自分のいつこの姿を見いだした

警網戦 五十嵐節郎

四ッ角

歩哨——立つてゐる

深夜

血潮——血潮

逃げだすは卑怯者

矛盾の馬車に積まれた奴等は闇を

喰ひ盡した道化役者だ

オオ——去れ トロイカ トロイカ

地獄行きの街道を真直ぐに

四ッ角

歩哨が立つてゐる

深夜の警網戦

白日の幽霊

松村 清

……こんな季節には學名のない雨類
がよきによき發生する……

かたよせられた俺達の呼吸は
まいんにちびしやびしやふりこぼしてゐる
陰湿な季節の背面には
かつゝ照つてゐる太陽

肢が 手が 胸壁が 生つ白い浮腫に
ゐざたなく けだるく
るら るら ねころび
あぶら抜けた眼球はより合つてくる
黙つてゐる

めあてのない万年間の陰湿が
そそつとよごんでゐる

太陽光を拒否する！
太陽光を渴仰する！

陰湿の万年間に破れる音響が
一瞬に捲き起す黒つ光りの旋風
ざらざら鑽油が流れる坑底から
白晝にさらけて 無惨な目をなげろ！

よろけ！

最初

中野勇雄

妻よ
新しい呼び名の何といふ愉快であらう
俺は満足に酔ひしれて
ネオ・ブルジョア觀念にまでゆるゆる
身をのばす
革命よ
妻よ
これがまた歴史といふ膏藥で繼ぎ足され
てゆくのだと誰が考へようか？

后記

勇 雄

・突々次 十七人の詩 盛夏の生彩
・愈 内外から我等の果を射撃したい

・三野混沌 詩集「開墾者」 價十錢 突社版
・全 「百姓」 價二十錢 突社版

・今輯は私事の都合から殆ど大部分松本純一君の手
を煩はした 陳謝

昭和二年八月十日印刷納本
昭和二年八月七日發行
〔頒價十錢〕

編輯人 福島縣平町二丁目 中野 勇
印刷發行人 福島縣平町田町六二 松本 純
發行所 突社 福島縣平町田町六二

